朱舜水の受容から見る清末民国初期の政治的闘争

徐　燕　斌

はじめに

本稿は清末民国初期の中国で朱舜水がどのように受容されていたか、受容者たちの政治的立場や意見の相違点に着目しながら検討するものである。

朱舜水は、従来、江戸儒学に影響を及ぼし、明治維新に至るまで参照され続けた明末遺民とされている。また、近代日本においては「革命家」[1]とも認識されていた。しかし、これはあくまで明治期の知識人たちが同時代の文脈に影響されつつ形成した朱舜水像だと考えられる[2]。明朝復興のために奔走した朱舜水は、明清交替の際に日本に亡命し、生涯にわたって日本の儒学振興に尽力したが、清朝において朱舜水という名はほぼ完全に消失した。それは忘却されたというより、むしろ敵であることを理由に黙殺されたのであった。もっとも、清末になって内憂外患が相次ぐと、反清の志士として再び脚光を浴びるようになった。この現象は、中国で無名であった朱舜水が二十世紀以降に日本から逆輸入されたものと言える。両国の国家構造が異なるがゆえに、中国における朱舜水受容のあり方は日本とは異なっているし、中国においても画一的に受容されてきたわけではない。この多様な受容のあり方からは近代中国の政治的闘争の一面を窺うことができる。

中国において朱舜水が本格的にとりあげられるようになったのは、稲葉君山編『朱舜水全集』（明治四十五年）の刊行や、朱舜水来日二百五十年記念会の活動などに、刺激されたものと指摘されている[3]。先行研究では、銭明氏が、初期の改良派は朱舜水の人格と愛国心に、維新派は彼の忠君意識と大義名分論に、革命派は彼の反満抗清の言説と実学の学問に注目して朱舜水を利用したと指摘した[4]。一方、林瑛琪氏は、清末民国初期における朱舜水ブームが起こったのは、明治維新が成功した原因の一端を朱舜水に求めようとしたためだと主張した[5]。杜品氏は、梁啓超の朱舜水に対する態度の変化およびその原因を分析し、梁啓超が最初は康有為に追随し維新変法に努めていたため、反満の朱舜水は彼の目に入らなかったが、革命後に学理的研究の視座から朱舜水を高く評価したと指摘した[6]。ただ、革命派が朱舜水の遺民という身分を重要視したという論断はまだ検

討の余地があると考えられる。上述の先行研究は、明治四十五年の朱舜水記念会を受けて、中国国内でも舜水学社が設立されたことなどを示したが、具体的に日本側との交渉、舜水学社の設立、朱舜水専祠の建設等がいかに行われていたか、それらをめぐって知識人らの間でいかなる思想的相違が生じたか、さらにいかに政治的闘争へ発展していったかなどの問題について、なおも検討が必要である。

一、中国へ逆輸入された朱舜水

明治四十五年（一九一二）六月二日に、第一高等学校で朱舜水来日二百五十年記念会が催された。多数の知識人が参列し、特に陽明学者たちがこの記念会に参加することで、陽明学が当時危険視されていた社会主義とは距離があることを示そうとしたとされている。近代日本において、朱舜水はこのようなかたちでの存在価値が認められていた。これに対して、中国では当時ほとんど無名であった。このような状況にありながら、清末の日本考察・留学のブームを経ることで、その名が再び認知されるようになっていく。

最初に朱舜水に注目したのは、清末の駐日公使館の書記官黄遵憲（一八四八～一九〇五）とされている。彼は「朱之瑜……亡国の遺民、真に能く周粟を食はざる者にして、千古独り渠一人のみ」[7]と朱舜水の明朝への忠誠を高く評価した。後に『日本国志』では、「己丑、馮京第、黄宗羲明の魯王を以て海命を以て長崎に来りて師を乞ふも、達せず。朱之瑜も亦た来りて師を乞ふも、達せず」[8]と朱舜水の乞師の史実のみを記述し、彼に対する評価を下していない。なぜなら、黄遵憲は清朝の官僚なので明朝の遺民を顕彰するわけにはいかないからである。黄遵憲の朱舜水に対する評価は日本滞在中の留学生などを通して知識人の間で広がっていく。明治四十五年の朱舜水記念会はそれを加速させた。康有為（一八五八～一九二七）は朱舜水記念会開催時に神戸に滞在しており、参会していなかったが、五つの詩を詠んで偲んでいる[9]。主に儒学と結びつけながら朱舜水を詠んでいるが、明朝との関係または忠臣志士などのことには一切触れていない。彼はただ朱舜水が日本に亡命後、日本の儒学は盛んになったと詠んでいるだけである[10]。康有為は孔子教で中国を救おうとしており、戊戌変法の時期以来、満清族と漢民族との融合を図っていたため、朱舜水の反清反満の側面はむしろ意識しないようにしていたのだろう。康有為によれば、共和制が設立されたのち、人心が荒廃し、中華の至るところに危機が潜んでいる。清末より大きな危機に陥っているが故に、「中華救国論」を論じ、さらに同年八月に門人らに上海で孔教会を設立させた[11]。彼は『孔教会雑誌』に序文を寄せており、こう述べている。

> 日本近ごろ広く儒学を厲し、孔子を崇祀す、況んや吾が宗邦にして之を棄つるをや。且つ吾が国人は本より皆孔教中に覆幬せされ、会を立つるを待たず、猶ほ吾が国人々皆中国の民たり、注籍を待たざるなり。惟れ今列国交偪するに必ず国籍有り、諸教並立するも亦た教籍有れば、則ち孔教会の立つるは、已むべからざるなり[12]。

孔教会を設立する直前だった康有為は、朱舜水記念会の開催にある程度刺激を受けたと言えよう。それを受けて中国を孔子教で救おう

とする願望が一層高まった可能性は否定できない。

朱舜水記念会の影響は日本国内にとどまらず、中国国内へも流れ込んでいった。その架け橋となる一人は朱舜水の後裔の朱輔基である。明治四十五年に彼は妻を連れて米国に留学する途中、神戸に寄寓し、五月のはじめに「湊川楠公の碑前に拝伏して祖先を追懐し」た後に、「新聞紙上にて朱舜水記念会あるを知」った。更に「御手許より祭粢料御下附の特典を受け」た[13]。朱舜水記念会から正式に招待されたためこれに参列した。その前日（六月一日）に、彼は記者にこう述べている。

私は漢人で仲弼浙江紹興の生れ、父は肯夫と号し内閣学士でありました、私は中学校を卒て知事のやうなものになりましたが、満朝時代の役人ですので私は革命後の今日漢人の吾々が満朝の役人になつた事を寧ろ恥悔と思つて居りますから詳しい事は申しますまい、妻ですが之れも満朝の厳命で男子と女子とは権利が異ひます男子として御話しは出来ません、革命が成功した時程嬉しかつた事は今までにあり〔ま〕せんでした[14]。

このように、朱輔基は「漢人」であることを強調しながら、革命の成功に対して歓喜を隠さず自分の心情を吐露している。満清朝廷の役人として「恥悔」を感じるというのも先祖の朱舜水との心を一にし、記念会に参列するためと考えられる。また、革命によって、清朝を倒すという朱舜水の生涯の願望が実現したため、朱舜水を革命と連関させていると考えられる。このように朱舜水をめぐって日中間に革命という接点が見えてくる。

朱輔基は帰国した後に朱舜水の中国帰葬を思い立ち、浙江省の有志に告げた。民国政府の交通総長であった湯寿潛（一八五六～一九一七）等は賛助して杭州で舜水学社を起こし、祠堂を建てた。さらに浙江省議会により舜水の遺骸を日本から帰葬することが決定された[15]。しかし、実際は議会において祠堂建立の案が可決されていなかったため、湯寿潛ら浙江鉄路公司の取締役が自ら杭州の清泰門側に「衣冠之墓」にあたる祠堂を建てたのである[16]。湯寿潛は当時浙江鉄路公司の理事長であり、鉄道民営化の重要性を国の主権問題と連関して考えており、北洋政府交通部が国有化して借款に抵当にしようと企てたのを厳しく批判した。この時期に彼は舜水学社の設立と祠堂の建立に尽力し、更に馬一浮（一八八三～一九六七）に『舜水遺書』の編纂を始めさせた。祠堂の傍らには徳川光圀の木像を祀るための祠堂も建てた。湯寿潛はこれについて水戸徳川家の当主である徳川圀順（一八八六～一九六九）に以下の通り一報を送った。

東京徳川圀順侯爵鑒

舜水先生の祠墓、全く貴国の保護に頼り、今に至るも恙無し。弊国人 義公の盛徳を追念し、銘戴せざること靡し。況して潛は同郡の後学、基は同族の裔孫なれば、感荷尤も深し。今学社成立し、寿潛を公挙して主に社事を任す。茲に義公紀念の期に届り、謹んで社員全体を率ゐて上電致敬す。

杭州湯寿潛、朱輔基等叩す[17]

湯寿潛における鉄道国有化問題と朱舜水とは一見関連性がないように見えるが、革命後の国家主権をめぐって一定の共通性がある。

革命後に新政権の内部で利権紛争が絶えず起こり、湯寿潛も最初は「革命時代の必ず経る階級」[18]と認識していたが、不穏な政局は混迷を極めていく。彼自身新政権において冷遇されたため、政界から隠退しようとしている。彼は表面的には安定している憲政と社会秩序に満足し、急進的な革命派には賛同していないが、のちの袁世凱復辟には失望したと考えられている。[19]

朱舜水記念会開催の翌年（一九一三）五月に湯寿潛の命により、朱輔基と同族の朱景彝は日本に渡り、湯の紹介状を持参して稲葉君山を訪問し、朱舜水遺骸を帰葬する計画援助を依頼した。二十八日午後に朱輔基は第一高等学校に赴き、新渡戸稲造前校長、瀬戸虎記校長などの案内で同校内の朱舜水記念碑を礼拝した。その後、各方面と交渉すべく、外務省の瀬川文書課長に右の希望を述べたのち、外務省に大いにこの美挙を賞賛された。一方、朱舜水記念会の会員らも協力して舜水の墓所発掘の許可を徳川家に交渉した。[20]交渉の結果、（一）舜水先生帰葬の意を以て墳墓の土をもたらし帰ること、（二）舜水先生の画像並びに遺物を贈呈すること、（三）徳川光圀の画像を贈呈すること、という合意に達した。[21]日本側は最大限に朱舜水の後裔を接待し、日本社会に多大な影響を及ぼしたとされる朱舜水を母国に帰葬させることに積極的に協力していたと言えよう。清朝の滅亡は朱舜水の生涯の志が実現したものだという論調が盛んであり、革命への支持とも考えられる。[22]

湯寿潛はこの事業を通して朱舜水の明朝への忠義及び反清精神を広めようとしていたと考えられる。彼をはじめ浙江知識人らは浙江省議会に提出した朱舜水専祠案で朱舜水の反満精神を大々的に顕揚した。湯寿潛における反満の気持ちも垣間見られる。[23]彼は清朝の専制体制に反対していた。彼によれば、清朝統治期間に民を苦しめた「専制の毒」が尤も甚だしいという。[24]実際、彼は清朝護持から共和制支持へ、更に革命新政権から引退するまで時勢によって行動していたが、生涯にわたって「無国の惨を免れる」[25]という政治理念を貫いていた。つまり、彼においては「国」が最重要である。朱舜水を顕彰するのは、同郷としての感情もあれば、革命によって専制体制が瓦解し新国家が建てられたことへの支持もあると考えられる。

二、鄭孝胥から見る朱舜水

湯寿潛は舜水学社を設立後、多くの知識人らに朱舜水を詠む詩を乞うた。舜水学社の設立、朱舜水祠堂の建立を通して民国初期に朱舜水の名が広まった。この時期、朱舜水研究が一世を風靡した。湯寿潛の主導する朱舜水高揚活動は多く好評を博したが、湯寿潛に対する非難も見られる。その中で、とりわけ鄭孝胥は湯寿潛を強く非難した。湯寿潛は、清末に共に予備立憲会を設立し憲政の確立を唱えた同志である鄭孝胥に、朱舜水を詠む詩を乞うた。それに答えて、鄭孝胥は詩を詠んで清遺民の自分を明遺民の朱舜水に擬えていて、朱舜水の「故国旧君」[26]への忠義を大いに称賛する一方、湯寿潛を厳しく批判した。

朱舜水は反満抗清の志士として知られるが、鄭孝胥はこの点には重きを置かず、むしろ前王朝への思念と復興願望に目を注いでいる。彼における「国」は二重性を意味しており、清国と民国との「二重国籍」と言えるが、民国は彼にとって「敵国」[27]である。鄭孝胥は清末に湯寿潛、張謇（一八五三～一九二六）と予備立憲会を設立し自

分も会長を担っている。彼がなぜ民国に敵愾心を持っているのか、彼にとっての「立憲」はいかなるものなのかという問題、ひいては急進的な革命派とは異なる彼の思想的構造と政治的理想のあり方が検討すべき課題として浮上してくる。

（一）清末における鄭孝胥

鄭孝胥は、福建閩県人、科挙郷試一位で及第し、北上して李鴻章のもとで洋務運動に携わっていた。光緒十七年（一八九一）に東京の清国公使館随員となり、翌年、同公使館参賛官、光緒十九年二月、神戸兼大阪駐在領事に任命された。日清戦争が始まると、同月二十二日に帰国した。しかし、北洋艦隊を率いた李鴻章と官僚集団全体に対して批判を下している。

> 合肥は耄にして驕なり、平日の居心行事、専ら苟且偸安を以て計を得と為す。（中略）中国は近年習気極めて重く、上より下に至るまで名実に務めず、徒らに矯飾を為し、日に陋劣に趨きて、驟かに挽くべからず、朝廷初めて整頓を示すと雖も、然るに豈に能く遽かに革まらんや。[28]

「合肥」は同地出身の李鴻章のこと。驕り高ぶった李鴻章は「苟且偸安」し、中国は上から下まで名実ともに備わらず、うわべだけを飾っている、という李鴻章に対する鄭孝胥の批判的な姿勢は、官僚集団として権勢を振るった淮系に対する批判となった。これは李鴻章の幕下から離れるきっかけとなったと見られる。[29] それ以降、鄭孝胥は淮系と対立する非淮系の官僚集団の指導者である張之洞の幕下に入った。彼は幕僚の一人として商務局、武備学堂の設置などの事業に取り組み、張之洞を支えていたと言って良い。栗林幸雄氏が指摘するように、張之洞が日本を模範とする中国の近代化を模索する中で、日本で咀嚼された形での西洋科学・技術に理解のある鄭孝胥のような幕僚の役割は少なくなかったと言える。[30]

光緒三十二年（一九〇六）十二月十六日に鄭孝胥は湯寿潜、張謇らと予備立憲公会を上海で設立し、彼自身も会長に推挙された。鄭孝胥をはじめとする立憲派は、立憲の「恩名」は必ず宮廷にあり、その「実力」も政府にあるが、しかし、「革命の乱党」は「暴烈」にして政局に不穏をもたらしているので、「立憲の人心」を利用して「革命の患気」を消滅させなければならないと力説していた。[31] 立憲派は政治腐敗や内憂外患の状況を立憲によって緩和し、革命を叫ぶ高ぶりを鎮静化し、国の存続を図ろうとしていた。しかし鄭孝胥は湯寿潜、張謇とは政治、鉄道などの問題で齟齬が生じ、袂を分かっていった。武昌起義の後、湯寿潜と張謇の二人は共和制へ近寄っていったが、鄭孝胥は一貫して清朝に執着しており、二人を「廉恥を識らず」[32]、「毫も操守なし」[33]と厳しく批判し、彼らのような「南方士大夫」は「排満」的な心理で共和制支持に傾斜していると非難した。

中華民国臨時政府と清政府との南北議和が行われ、共和制が確定した後に、鄭孝胥は次のように悲憤慷慨した。

> 北は乱臣たり、南は賊子たり、天下は安んぞ亡びざるを得んや。（中略）名を干し義を犯し、心を喪ひ良に昧きは、此れ乃ち豺狼狗彘の種族のみ、何ぞ以て世界の人類に列するに足らんや。孟子曰く、「上礼無く、下学無ければ、賊民興る」と。今日の

謂ひなり。（中略）夜、爆竹の声を聞くこと甚だ繁く、是に於いて大清二百六十八年 此の夕に至りて畢れり。[34]

「乱臣」は清政府を代表する北洋軍閥たる袁世凱を指しており、「賊子」は湯寿潜、張謇らをはじめとする「南方士大夫」即ち江浙知識人を指していると考えられる。つまり、鄭孝胥から見れば、国を害する乱臣と親不孝な賊子は、忠孝に背いて革命派と結託して清朝を滅亡させた禽獣の種族である。『孟子』を念頭に「上礼無く、下学無ければ、賊民興り、喪ぶること日無けん」（離婁上）を引用してこのような惨状を説明している。実際、鄭孝胥は革命後に読経社を設立し、『孟子』『礼記』を中心に会読していたこともある。『孟子』を愛読し、孟子の学問に長けることは、後の王道主義を掲げる「満洲国」が唱えた「王道楽土」のユートピア建設の礎になったと考えられている。[35]鄭孝胥は「君主の臣下」としての責務を固守し、一貫して日本のような君主立憲制の確立を目指していたが、自分の同志に裏切られた痛恨と彼らへの蔑視も察するに難くない。

（二）鄭孝胥と湯寿潜の衝突

先述した鄭孝胥が詠んだ朱舜水の詩に戻る。その中の「紛紛正欲廃大倫、謬託同心定何益」という一句は、今の時代はみな君臣父子たる「大倫」を棄てており、いまさら朱舜水を顕彰し彼との「同心」を喧伝することは何の益もなく、むしろ「義」に反することであると皮肉を込めて詠んでいる。湯寿潜の作詩依頼に対し、日記には次のように記している。

廿四日、湯蟄先の書に復す。湯は杭州議会に於いて朱舜水祠を建つるを議し、舜水に漢族禦侮の意有るを以て、舜水学社を為りて以て自ら其の排満の説を解せんと欲し、余に求めて詩を為らしむ。[36]

鄭孝胥によれば、湯寿潜は自分の「排満の説」を敷衍するために朱舜水を反満抗清の漢民族志士とみなし、彼自身が共和制支持の立場にあることを正当化しようとしているという。つまり、朱舜水を顕彰することを通して彼自身の「排満」、ひいては革命派と結託して共和制を成立させることを鄭孝胥に理解してもらうために作詩を依頼している、という鄭孝胥の考えが読み取れる。先述の通り、武昌起義の直後に、鄭孝胥は以下のように批判している。

武漢の乱の後、国人は多く排満を以て心理と為し、士君子は従ひて之に和し、廉恥の何物たるかを識らず、黎元洪に於いて何をか責めん。宜しく書を作りて一に張謇湯寿潜の罪を正すべく、他は道ふに足らざるなり。[37]

国中に「排満」が蔓延する現状に対する鄭孝胥の不満が窺われる。「排満」は古くから中華思想における漢民族が根強く持っている自民族中心主義とも言われる。鄭孝胥自身は満清朝廷に仕える士大夫として、「華夏」と「夷狄」の種族関係の論争には拘らず、士大夫としての「気節」自体に注意を払っている。[38]つまり、鄭自身が忠孝を実践した士大夫であり、張謇や湯寿潜のような「乱臣賊子」に対して、彼自身の正統性を表明していると見られる。

さらに湯寿潜への返書において、鄭孝胥は率直に彼を批判している。

余 書を復して曰く、「舜水は孤忠苦節にして、吾甚だ之を敬ふ。然れども吾が輩は不幸にして亦た亡国の際に生まれ、大節をして古人に愧ぢざらしめんと欲すれば、乃ち善く柳下恵を学ぶ者たり。然らずんば、舜水知有れば、必ず乱臣賊子を引きて同志と為さず、其れ厳しく斥くる所の者と為らざるは幾ど希れなり」と。[39]

このように、鄭孝胥は朱舜水の「孤忠苦節」を敬っている。さらに、朱舜水と同様に亡国の際に生まれた人として、敢えて柳下恵に倣って「大節」を保とうとしているという。総じて、鄭孝胥は柳下恵を称賛していることが看取できよう。柳下恵は春秋時代魯国の賢者であり、直道を守って君主に仕えたことで知られる。孟子によれば、柳下恵は、いかに良からぬ君主に仕えても恥じず、いかに低い官職でも役不足と思わず、自分の才能を隠さずに努力し、必ず自分の信ずる道を行って志を曲げない。孟子は彼を伯夷、伊尹と並んで高く評価し、「聖の和なる者」であり、「聖人」でもあると評価する。孟子が言うに、「伯夷は隘なり、柳下恵は不恭なり。隘と不恭とは、君子由らざるなり。」つまり、「不恭」は不謹慎ということで、柳下恵の最大の欠点であり、しかも君子にあるまじき行為、あるいは従うべきでない道でもある。伯夷、伊尹とは君子になるための道が異なるものの、帰着するところはすべて「仁」であるため、柳下恵もまた実に君子たるものである、というのが孟子の言いたいことであろう。当時、魯国の王室が式微に向かっており、柳下恵は権勢に迎合せずに何度罷免されても、自分の国である魯国に残り、魯国の君主に仕え続けていた。

もっとも、先述の「湯蟄先求作明遺老朱舜水詩」と合わせて考えれば、「柳下恵を善く学ぶ」という言葉から鄭孝胥自身の柳下恵に対する感情が二点窺える。一つは、柳下恵のように忠実に君主に仕え続けた臣下になりたいという思いである。もう一つは、孔子が言うように、「柳下恵を学ばんとする者、未だ此れに似たる者有らず。至善を期して其の為に襲らず、智と謂ふべきかな。」[40]ということである。つまり、亡国の際に「大節をして古人に愧ぢざらしむ」という「至善」を追求するべく、自分にはできないことを敢えてするのは逆に善ではなく、他人の行いにそのまま従ってはいけないということを意味する。ここで、鄭孝胥は主として後者の意味を取っていると考えられる。一方、朱舜水も朱熹との系譜関係に結び付けることを「不可」とし、「人は自立を貴しとし、必ずしも紫陽に攀附せず」と自立性を主張していた。換言すれば、「大節」を保つには古人に倣う模倣行為あるいは先人との結びつきだけでは十分でなく、最終目標である「至善」に向けて自身の内なるものにより行動せねばならないということであろう。鄭孝胥から見れば湯寿潜が朱舜水を顕彰することはおかしなことであり、清朝（君主）に忠義を尽くし続けないのは、朱舜水が生涯の志としていた明朝復興とは逆を向いていることなのである。それゆえ、鄭孝胥は「善学柳下有不可、妄附紫陽渠所斥」[41]と詠んで、湯寿潜が強引に朱舜水と「反満」によって精神的統一を図ろうとすることは、朱熹とあえて結び付けようとしなかった朱舜水にも批判されるだろうと言っていると読み取れよう。

さて、鄭孝胥は風前の灯になった清朝に対していかなる感情を持っていたのか。

聞くならく、満洲皇族の争ふ所は、優待条款のみ、是れ已に亡国に甘心し、孰か能く之を助けん、哀しきかな。苟くも皇室に社稷に死し、宗廟に殉じ、寧ろ死すとも辱められざるの志有れば、則ち忠臣義士 激発奮励して、縦ひ亡国に至るとも、猶ほ史冊の光と為るべきのみ。今聞くならく、惟だ載澤、溥偉のみ遜位を願はず、其の余は皆苟活偸生し、敢へて反抗せず。王室は此の如くして、忠義を臣民に責めんと欲するは、難し。[42]

以上のように、鄭孝胥の皇室への失望は明らかである。皇室が社稷・宗廟のために殉死し、自分の統べる国と臣民に責務を負えば、忠臣義士は奮励して国に最後まで忠を尽くし、たとえ亡国という結果に陥っても史書に名をとどめることができる、と説いている。つまり、君臣関係における臣下の忠義は一方通行のベクトルではあるが、逆方向からの歩み寄りがない場合は、このベクトルは行き詰まってしまう。古来の君臣関係は「父子天合、君臣義合[43]」という理念に反映されている。父子関係は血縁で結ばれているのに対し、君臣関係は「義」によって両者を双務的契約関係者のようにしてできたものである。「義」がなければ君臣関係自体が成立しない。そうすると、君主が天理に反する行為をした場合、臣下は君主に忠義を尽くす必要もなくなり、君臣関係も自然に瓦解する。この論理に従えば、鄭孝胥自身も清に臣下として忠義を尽くさなくてよくなるが、彼は柳下恵を取り出して逆の方向へと展開していく。今の皇室(君主)が「苟活偸生」し、良からぬ行為をしても、自分は依然として君主に仕えて忠義を尽くすということであろう。これはまさに彼の内における矛盾した心情とも言える。それゆえ、古人に恥じないように、柳下恵の処し方を学ばなければならず、さもないと、「乱臣賊子」になってしまい、朱舜水にも斥けられる、と鄭孝胥は言っている。彼は張之洞の推薦で清末新政に積極的に関与していた[44]。光緒帝に召見・称賛されたことによって、清朝・君主への忠誠の意志を固めたと考えられている[45]。そのため、「湯蟄先求作明遺老朱舜水詩」と同様、鄭孝胥は湯寿潜への返書で、舜水学社を設立し朱舜水を「排満」の正当化のために利用する湯寿潜のことを赤裸々に「乱臣賊子」と痛罵しているのであろう。

鄭孝胥は柳宗元の説を深く信じていると彼は言う。その君臣観も柳宗元の影響を受けたものである。彼によれば、君主に仕える際、君主が誤った道を歩む前に君主を正しい道に従うよう本心から段階的に導くべきであり、「直言切諫」せざるをえない時は、さらに君臣間の不信感が募るという[46]。鄭孝胥においては、また荀子の主張する「従道不従君」の政治理念が浸透していた。もともと鄭孝胥は君主に道を実践することを託していたが、のちに君主を借りて道を行うようになった[47]。それゆえ、君主という存在自体を失ってはならないのである。以上のように、満洲皇族ないし清朝が堕落してしまったことに彼は不満をこぼした。のちに日本軍部の力を借りて王朝体制の立て直しを図ろうとした際の彼の溥儀に対する態度は、既に一般的意味の「忠君」ではなく、彼にとっての正しい道を君主に歩ませるように導いたと考えられる[48]。

鄭孝胥は朱舜水について「斯人辟世雖不返、故国旧君心匪易」と

詠んでいて、舜水の「故国旧君」こと明朝及び君主へ忠を尽くす変わらざる心と共鳴していると見られる。[49] しかし、そもそもこのような朱舜水像はあくまでも後世の人々から付与されたイメージであり、一種の「遺民幻想」と呼んでよいかもしれない。鄭孝胥はこの「遺民幻想」に憧れながら、そのような「遺民」たらんとしていたと考えられる。ところが、朱舜水は明朝に忠義を尽くし続けたが、十二回の仕官要請を辞退した。なぜなら、彼は明朝の政治状況に賛同するわけではなく、むしろ嫌悪感を持っており、滅亡の原因を明朝内部に求めているからである。[50] この行動は鄭孝胥の選択した道と噛み合わないところが大きいであろう。その上、後に鄭孝胥が帝国日本軍部の傀儡になって「王道主義」を掲げる「満洲国」の建国に尽力したことは朱舜水とは全く反対の道を歩んでいったと言える。

以上の通り、湯寿潜と鄭孝胥の間の応酬をめぐって両者の朱舜水に対する感情そして思想的衝突を検討した。文化保守主義者とされる東南地域の知識人たる湯寿潜が舜水学社を設立して社長職に当たったのは経世実学より西学中源を経て、中国伝統文化へと回帰したことを意味する、という捉え方も見られる。[51] 湯寿潜は革命後に新政府の官職に就いた時期があったが、それを彼の革命派への参与と読み取るのは間違いである。先述の通り、彼は政治的に鄭孝胥のような保守主義を貫くわけではないが、革命派の急進ぶりにも賛同せず、革命派とは一定の距離を置いていたのである。湯寿潜、鄭孝胥二人は文化的共感性によって繋がっていたため、政治的には分岐したものの、文通によって二人の友情が保たれていたことが窺われる。しかしながら、湯寿潜には「反満」という心理もあるため、二人の間には埋めがたい溝が存在していたに違いない。鄭孝胥は民国を消滅させて孔孟の道が行われる中国への回帰を図ろうとしており、君主を滅ぼす意図はない。先述したように、鄭孝胥は君主を正しい道へ導くのが臣下の責任であると考えており、自分の政治理想を君主に託していたがゆえに、君主自体は存在せざるを得ないのである。彼ら二人とも朱舜水を自身に有益な方向に解釈し、自らの行動を正当化するために利用していると考えられる。

三、銭恂から見る朱舜水

（一）朱舜水専祠案

最初に朱舜水祠堂の建立を建言したのは、張之洞の幕僚の銭恂（一八五三～一九二七）である。銭恂は、光緒二十四年（一八九八）に来日し、翌年に正式に張之洞から遊学日本学生監督に任命された。光緒三十年（一九〇四）以降はオランダ、イタリアへ出使大臣として赴任し、外交官として活躍していた。民国期においては、浙江図書館館長、教育部の仕事に従事し、民国三年（一九一四年）に参政院参政に任じられていた。[52] 銭恂と湯寿潜との交流は殆ど見られないが、同じ浙江省出身のため、同郷として朱舜水を記念したことが推測できる。先述したように、湯寿潜が率先して舜水学社を起こした後に、浙江省の有志らが浙江省議会に提案した祠堂建設の案は否決された。実は、銭恂は舜水学社設立の発起人に名を連ねており、祠堂建設の提案も自分の名義で提出したのである。銭恂の弟である銭玄同（一八八七～一九三九）は日記にこう記している。

『朱舜水先生集』及び舜水紀念会の書を閲す。舜水紀念会は、

日本人の設くる所、蓋し舜水歿後より今に至りて二百五十年に垂きなり。聞くならく朱仲平なる者有り、舜水の後裔たり、此の次に日本の会に与るより帰る。携へて帰るに舜水の遺刀、信諸物有り。大兄は一議案を提ぐるを擬し、祠を建て以て大漢の先烈を揚げんとす。現に先づ一会を設けて以て此の事を集議するを擬す云々[53]。

朱輔基が帰国後に、銭恂は直ちに「建祠」の議案を提出しようとしていた。「先づ一会を設け」るというのは舜水学社を設立することを指しているだろう。さらに、その目的は「大漢の先烈を揚」げることにあると明確に表明している。

銭恂をはじめ浙江省の有志らが提出した議案にも強い反満の意が窺われる。

先生既に卒し日本に葬らる。日人其の徳教を被り、祠祀墓祭今に迄りて衰へず。先生は漢族禦侮の志を抱き、海外を輾転し、中土を恢するを図るも志す所成らず、遂に日本に留まり終身返らず。（中略）方今漢族光復し、才俊奮起し、豊碑に績を勒み、俎豆を千秋にし、独り先生のみ潜徳の幽光を蘊へ、忠骸を東土に霾（ママ）む。今を撫して昔を追ひ、能く恫む無からんや[54]。

この議案の中では、朱舜水は満清に蹂躙された漢民族として海外乞師をしたが、明朝恢復の希望が消え失せたため、日本に定住したと言及されている。これは事実と合っていると考えられる。さらに、辛亥革命によって「漢族光復」が成功したため、生涯漢民族の王朝たる明朝を恢復しようとした朱舜水を中国へ帰葬する必要性を説いている。「今を撫して昔を追」うという言葉には、漢民族が満清に蹂躙された過去と、日本に「忠骸」を埋めたまま「光復」された「中土」へ帰ることができない当世を痛む気持ちが窺われる。

（二）銭恂の革命的活動

銭恂は駐日前から既に清朝に対して不満を抱き、清の滅亡を企てていたと言える。鄭孝胥は以下のように銭恂を非難している。

銭念劬 前は京師の一朝士の宅中に在り、昌んに言ふこころは、「中国決して必ず分裂し、江浙呉楚 日本の割く所と為りて、日本の臣妾と為るを得るが如く、此れ大幸なり」と。湖南京官の之を聞く有り、甚だ憤り、孝胥に告げて曰く、「再び見ゆれば、必ず其の頰を批たん」と。銭の検しからざること此くのごとし。亦た願はくは圳 慎しみて其の言を聴かん。南皮は頗る栗然として、曰く、「此れ何らの語や、銭守乃ち妄りに発せんや」と[55]。

以上のように、鄭孝胥は銭恂が日本へ赴任する前に既に、彼と政治的立場が対立して、彼を厳しく批判している。これは鄭孝胥が張之洞に伝えた内容である。同じく張之洞の幕僚として活躍していた同僚であるため、二人の間に潜在的競争関係が存在する[56]。上記の話は鄭孝胥が故意に張之洞に吐露したのだというが、しかしこのような言論は銭恂の政治的立場とも一致していると言える。銭恂は駐日期間に、さらに自国（清朝）への蔑視を見せた。汪有齢（一八七九～一九四七）は当時東京に留学しており、彼によれば、銭恂は「東京

に在り日人に対して中国を罵るを好む」[57]という。銭恂は駐日期間に張之洞の代理とされる職務に携わり、日本側の要人・軍人とも往来し、次のような話をしていた。

> 此夜仲ノ町にて銭恂と会し、平岩の通訳にて時事談を為したる一節に、張等は天子蒙塵（多分長安に）することもあらば清国は無政府と為るべく、其際には南部二、三の総督は連合して南京に一政府を立つるの止を得ざるに至らん云々の語あり。[58]銭恂役所に来訪。張之洞より新政府設立の場合あるやも知れず、目下兵力を厚ふし置くことは何よりの急務に付き、呉元愷の二千、張彪の二千五百の外、更に三千を募集し度きに付き、大尉二人と小銃（三十年式或は村田連発）五千梃を所望すとのことを語る。[59]

以上のように、銭恂は張之洞の代理として宇都宮太郎（一八六一～一九二二）に新政府の設立や援兵のことを主張している。これはあくまでも宇都宮太郎の日記であるため、信憑性はまだ検証される必要があるものの、当時の時勢と銭恂自身の政治志向から見れば、彼の反満への転向の裏付けとすることができよう。直接の関連はないようであるが、上記の記述は明末における南明政権の成立と朱舜水の「乞師」を彷彿とさせるように思われる。少なくとも反満という立場で朱舜水を顕彰したのは確実である。

銭恂は日本駐在期間に積極的に在日留学生に革命への方向性を持つ改革的理念を教え込んだことが窺える。彼は太公という筆名で浙江省出身の留学生が創刊した『浙江潮』に寄稿し、文章には現状打破や開拓精神の主張を込めている。[60]これは『浙江潮』の宣伝する反満反清の革命思想と足並みを揃えていると考えられる。日本側は銭恂らのような改革派を利用して新しい国を樹立しようとしている。当然、日本の意図は自国が利益を得られるような国を作ることにある。日本側は改革派と交流し、新政権の樹立で意気投合した。[61]両者の根本的目標は全く違うものの、それに到達するための道程は重なるのであろう。むしろ、両者は相互に利用し合っていたと言える。銭恂のかような言動は鄭孝胥や湯寿潜から見れば革命派にあたるような急進ぶりであろう。実際、彼は清朝の外交官として維新派、革命派と緊密なつながりも持っていた。しかし、彼は「根本改革之説」[62]を主張したが、あくまで改革に止まっており、革命派とは完全に吻合するものではないと考えられる。

先述の通り、銭恂や湯寿潜らは朱舜水専祠建立の案を浙江省議会に提議したが、不可とされた。しかし、同じく明末清初の文人で清の統治に反抗した張煌言（一六二〇～一六六四）との二人合祀の祠の建立は可決された。[63]多数の議員が反対したことも翫味するに値する。これは恐らく二つの原因があると推測される。まずは、朱舜水はそれほど重要な人物ではないこと。次は、新政府側は銭恂や湯寿潜らの陳情案の内容に不同意であることである。なぜなら、同年の十二月に政府側の提案が批准されたためである。その提案者は当時両浙塩運使だった張栩である。内務部の公報によれば、現今「国体変更」したため、速やかに褒揚して、国民に朱舜水の精神を知らせるために批准したという。[64]この「国体変更」という語は興味深い。民国政府が成立したため、前明遺老の朱舜水を専祠に祀ることができるようになったのである。しかし、これは新政府が朱舜水の反満

精神を考慮していたことを意味せず、ただ朱舜水の学風や孤忠を褒揚するためと考えられる。一方、銭恂や湯寿潛らは朱舜水を反満の志士と仰いだのである。その「陳情書」には漢民族中心主義的な言葉が書かれており、反満主義を匂わせるところも多い。これは樹立したばかりの新政府にとっては都合が悪いことだった。

おわりに

本稿は朱舜水顕彰の事業に関する知識人の言行をめぐって、清末民国初期の官僚・知識人間における政治的闘争の一側面を描出した。すなわち湯寿潛、鄭孝胥、銭恂という三人を取り上げ、それぞれの朱舜水に対する評価を明らかにした。三人はともに張之洞の幕僚として活動していたが、その後は異なる道を歩んでいった。銭恂は革命的な言動を取ったけれども、実際には革命の道を歩んでいなかった。彼が中心になって政府議会に提出した朱舜水専祠建設の陳情書からも分かるように、湯寿潛や銭恂は自分の反満の意志を朱舜水に託していたのである。銭恂は清末から革命派と緊密な関係を持ち、強い反満反清の意志を抱えていた。湯寿潛は清朝護持から共和制支持へと、時勢の変化によって行動した。革命後に朱舜水顕彰を行ったことには、浙江省の同郷として遺民・志士である朱舜水を故郷へ帰葬し遺志を実現させようとするほか、革命による専制体制の終結と新国家の樹立を支持する意図が窺われる。他方、鄭孝胥は一貫して民国を敵視し、王朝体制に戻そうとした。彼は忠臣たる朱舜水を評価し、朱舜水を反満反清という面で喧伝した湯寿潛や銭恂らを強く批判した。鄭孝胥は清末の「遺民」として屈折した忠の観念を有していた。総じて言えば、朱舜水が中国へ逆輸入された際に、それぞれの政治傾向に基づく受け止め方で定着したのである。彼らの朱舜水像の比較を通して、当時、排満にはさまざまなレベルが存在したことが明らかになった。しかし、明朝復興もさることながら、朱舜水自身がより念頭に置いていたのは、儒教の存亡危機と「大同」（『礼記』礼運）という理想社会の構築であり、「大同」が実現する場を日本に想定していた。儒教頽廃と明朝滅亡による中華文化の凋落が朱舜水にとっての最大の痛恨だったのである。[65] 韓東育氏が主張するように、朱舜水が日本で押し広めようとしたのは、道学よりは、むしろ実学的な「浙東中華主義」である。[66] 結果、この「浙東中華主義」は日本の「華夷変態」に御墨付を与えた。朱舜水のこうした実像と比べてみると、清末の志士たちは彼らが求めた理想の志士として明末の朱舜水を描いた。近代中国の知識人が構築した志士像は、前近代の志士に彼ら自身の立場を投影したものだったのである。

【附記・謝辞】本稿は日本儒教学会二〇二三年度大会における口頭発表をもとに加筆・修正を加えたものである。発表・執筆の際に有益なる御意見を賜った各位に御礼申し上げる。

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2108 の支援を受けたものである。

注

（1） 石東国「水戸学と陽明学」『陽明学』陽明学会、十号、一九〇〇年、三三頁。

（2） 拙稿「近代日本における朱舜水の「志士」像―知識人の論説を手が

かりに―」『中国哲学研究』東京大学中国哲学研究会、第三十一号、二〇二一年四月、二十八～六十三頁。

(3) 石原道博『朱舜水（新装版）』吉川弘文館、一九八九年、二六三頁。

(4) 銭明「清末民初的朱舜水熱」『浙江学刊』一九九六年第五号、一九九六年九月、八十六～九十頁。

(5) 林瑛琪「戦前朱舜水研究：一個知識社会学的考察」『鵝湖月刊』第二十九巻十一号、二〇〇四年五月、十五～二十四頁。

(6) 杜品「梁啓超何以対朱舜水関注最晩而評価最高」『山西檔案』二〇一七年三号、二〇一七年五月、一七四～一七六頁。

(7) 黄遵憲著、陳錚編『黄遵憲集』第一冊、中華書局、二〇一九年、四十八頁。

(8) 『黄遵憲集』第四冊、前掲、一六三四頁。

(9) 康有為撰、姜義華・張栄華編校『康有為全集』第十二集、中国人民大学出版社、二〇〇七年、三六七頁。

(10) 同上、「明末朱舜水先生避地日本、徳川儒学之盛自此伝焉。今二百五十年、徳川公国順挙改碑祭、名侯士夫集而行礼者四百余人。吾在須磨不能預盛典、寄松樹植墓前、附以五詩以寄思仰」とある。

(11) 呉天任撰『康有為先生年譜　下』藝文印書館、一九九四年、五二一頁。

(12) 「孔教会序　其二」『孔教会雑誌』第一巻第二号、十三頁。『辛亥革命時期期刊匯編』編纂委員会編『辛亥革命時期期刊匯編』第四十冊所収、首都師範大学出版社、二〇一一年、二七五頁。

(13) 「朱舜水の祭典」『風俗画報』四三四号、一九一二年七月五日、八頁。

(14) 『読売新聞』一九一二年六月二日朝刊、三面。

(15) 『東京日日新聞』一九一三年五月二八日七面。

(16) 湯寿潜「舜水遺書序」、馬一浮編『舜水遺書』、一九一三年。

(17) 汪林茂編『中国近代思想家文庫　湯寿潜巻』中国人民大学出版社、二〇一五年、五七六～五七七頁。

(18) 同上、三三四頁。

(19) 汪林茂「湯寿潜的憲政建設実践（1911―1917）」『浙江社会科学』二〇二一年第五号、二〇二一年五月、一四一頁。

(20) 『東京日日新聞』一九一三年五月二十八日七面。『読売新聞』一九一三年五月二十九日朝刊三面。『新世界』一九一三年六月二十日四面、スタンフォード大学フーヴァー研究所邦字新聞デジタルコレクション。

(21) （日）『時事新報』一九一三年六月二十日四面。さらに、朱輔基ら二人は水戸徳川家に対して、杭州の舜水学社が落成した後に代表者が来日して舜水墳墓の土を乞う際に手続きを上手くしてもらえるよう依頼した。これらは中国の新聞も訳載した（『新中国報』一九一三年七月五日七面を参照）。

(22) 黒板勝美「朱舜水と湊川碑」『日本及日本人』第五八〇号、一九一二年、五十頁。

(23) 『中国近代思想家文庫　湯寿潜巻』前掲、三六〇頁。

(24) 同上、三三六～三三七頁。

(25) 同上、三八八頁。

(26) 鄭孝胥「湯蟄先求作明遺老朱舜水詩」、黄珅・楊暁波校点『海蔵楼詩集』上海古籍出版社、二〇〇三年、二五三～二五四頁。詩の全文は以下である。「後楽園中好樹石、海波呑天滞魂魄。九原想与夷齊遊、徙倚祠門長太息。当年東隣重忠義、藩侯倒屣迎賓客。駒籠私第址堪尋、龍麓高墳碑未泐。我遊江戸嘗憑弔、竊敬此翁世莫識。忽聞学社噪杭州、帰骨建祠争甚力。斯人辟世雖不返、故国旧君心匪易。紛紛正欲廃大倫、謬託同心定何益。策名委質義難背、自許英霊照肝膈。善学柳下有不可、妄附紫陽渠所斥。願持此意入社来、儻訝異端従見闢。」

(27) 中国国家博物館編、労祖徳整理『鄭孝胥日記』第三冊、中華書局、一九九三年、一七〇五頁。「余与民国乃敵国也」とある。

(28) 『鄭孝胥日記』第一冊、前掲、四三六頁。

(29) 栗林幸雄「清末における鄭孝胥の思想と行動—幕僚・官僚時期を中心に—」『社会文化史学』第三十八号、一九九八年、六十七頁。
(30) 同上、七十四頁。
(31) 中国第二歴史檔案館編『中華民国史檔案資料匯編』、江蘇人民出版社、一九七九年、一〇〇～一〇一頁。
(32) 『鄭孝胥日記』第三冊、前掲、一三六一頁。
(33) 同上、一三五八頁。
(34) 同上、一三九六～一三九九頁。
(35) 黄慶澄は「根気清峭、胸次広博、尤長孟子之学」と鄭孝胥を評価した（黄慶澄「東遊日記」、王暁秋点、史鵬校『早期日本遊記五種』所収、湖南人民出版社、一九八三年、二五五頁）。鄭孝胥は駐日時期に、『説文解字』『日知録』『資治通鑑』などの士大夫の必読書を読んでおり、西洋学問とは一定の距離を置いていた（李秉星「鄭孝胥駐日時期的文化交往与心態」『日語学習与研究』二〇二〇年第一号、二〇二〇年二月、一一九頁）。
(36) 『鄭孝胥日記』第三冊、前掲、一四八四頁。
(37) 同上、一三六一頁。
(38) 秦燕春『清末民初的晩明想像』北京大学出版社、二〇〇八年、一五一頁。
(39) 『鄭孝胥日記』第三冊、前掲、一四八四頁。
(40) 『孔子家語』巻二「好生」に見える孔子の言に「魯人有独処室者、隣之釐婦亦独処一室。夜暴風雨至、釐婦室壊、趨而託焉、魯人閉戸而不納。釐婦自牖与之言、『子何不仁而不納我乎。』魯人曰、『吾聞、男女不六十不間居。今子幼吾亦幼、是以不敢納爾也。』婦人曰、『子何不如柳下恵然、嫗不逮門之女、国人不称其乱。』魯人曰、『柳下恵則可、吾固不可、吾将以吾之不可、学柳下恵之可。』孔子聞之曰、『善哉。欲学柳下恵者、未有似於此者。期於至善而不襲其為、可謂智乎。』」とある。
(41) 頭注に「『朱子家伝』云：或持譜謂朱文公有子為餘姚令、遂家於是。族人欲附之、舜水不可、曰、『人貴自立、不必攀附紫陽。』」とある（鄭孝胥「湯蟄先求作明遺老朱舜水詩」前掲、二五四頁）。
(42) 『鄭孝胥日記』第三冊、前掲、一三九〇頁。
(43) 黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』巻十三、中華書局、一九八六年、二三三頁。「父子兄弟夫婦、皆是天理自然、人皆莫不自知愛敬。君臣雖亦是天理、然是義合。世之人便自易得苟且、故須於此説『忠』、却是就不足処説。」
(44) 『鄭孝胥日記』第二冊、前掲、七九二頁。
(45) 鄭穎達口述、銭婉約記録校注「回憶祖父鄭孝胥及其児孫」『アジア文化交流研究』第三号、関西大学アジア文化交流研究センター、二〇〇八年三月。
(46) 『鄭孝胥日記』第四冊、前掲、二二七三頁。
(47) 李君「「存在之由」与「変遷之故」——1931年以前之鄭孝胥探研」、河北師範大学博士学位論文、一四九頁。
(48) 愛新覚羅・溥儀「我的前半生（全本）」群衆出版社、二〇〇七年、二二二頁。溥儀は陳曾寿の日記を引用し、皇帝の地位が形骸化されたことを記した。
(49) 朱舜水に遺民の想いを馳せた人は清末に少なからずいたとされる。例えば、王国維と羅振玉二人の日本亡命が朱舜水に倣うことと指摘されている。林立『滄海遺音：民国時期清遺民詞研究』香港中文大学出版社、二〇一二年、一七六頁。
(50) 韓東育「朱舜水「拝官不就」与「明征君」称号——兼渉「甲午戦争」前後的「復明」輿論」、『中国史研究』二〇一五年第二号、二〇一五年五月、一三二頁。
(51) 孫祥偉「東南精英群体的代表人物——湯寿潜研究（1890-1917）」上海大学博士学位論文、二〇一〇年、一七二頁。
(52) 高木理久夫「銭恂年譜」『早稲田大学図書館紀要』第五十六号、二〇〇九年三月、一～五十七頁。

(53) 楊天石主編『銭玄同日記（整理本）上』北京大学出版社、二〇一四年、二二九～二三〇頁。北京魯迅博物館編『銭玄同日記（影印本）（3）』福建教育出版社、二〇〇二年、一一三四頁。一九一二年十二月十九日条。

(54) 『新中国報』一九一三年六月六日、二面。

(55) 『鄭孝胥日記』第二冊、前掲、七〇三頁。

(56) 戴海斌「錢恂事迹補説：從張遵逵先生的來信談起」『中国文化』二〇一八年一号、第四十七号、二〇一八年五月、一一九～一二一頁。

(57) 上海図書館編『汪康年師友書札（一）』上海書店出版社、二〇一七年、九八四頁。

(58) 宇都宮太郎関係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策：陸軍大将宇都宮太郎日記1』岩波書店、二〇〇七年、八十八頁、一九〇〇年六月二十八日条。この条について、戴海斌「錢恂事迹補説 從張遵逵先生的來信談起」では、張之洞ではなく、錢恂自身の思惑を吐露したのだと指摘されている。

(59) 同上、八十九頁、一九〇〇年七月六日条。

(60) 「葛瑪航行印度事」「陸治斯南極探険事」、『浙江潮』第二期三版、一九〇三年、一四五～一五四頁。ほかに、同期に彼による「東京雑事詩」が掲載され、日本の維新志士、教育、近代的文明等が詠まれていた（一六一～一六四頁）。

(61) 戴海斌「錢恂事迹補説 從張遵逵先生的來信談起」前掲、一二二～一二三頁。錢恂が日本留学生監督に選ばれたのも日本側の意向である。当時の日本総領事こと小田切萬壽之助は張之洞に錢恂を推薦したと考えられる。「接日本総領事小田切自日本来電云、『湖北与日本所商派学生赴東及聘各種教習来鄂各節、望速遣知府錢恂赴東一行、以便面商。』並云、『此系外部令其発電、応即作為外部之電』等語。查錢恂已遵旨赴京、日内計已到、鄂省本与日本議定即派該守帯学生前往。」（苑書義・孫華峰・李秉新主編『張之洞全集』第九冊、河北人民出版社、一九九八年、七六五一頁。）

(62) 馮自由『革命逸史』初集、中華書局、一九八一年、五十四頁。「時錢恂任留日学生監督、与章為旧識、亦主根本改革之説、彼此往還、殊不寂寞」とある。

(63) （中）『時事新報』一九一三年四月十三日五面と六面、「浙省会議事紀」。原文、「十号午後一時、開第十三次大会。（中略）湯寿潜等陳請建設朱舜水専祠案。縁此事曾経臨時議会議決、将張蒼水、朱舜水両先生合設一祠。今復議改設専祠、衆議員多数反対、議長付表決、仍照臨時会議原案、設立二水先生祠、多数賛成、遂通過。」

(64) 中国第二歴史檔案館編『政府公報』一九一三年第二一冊十二月十八日第五百八十四号、上海書店、一九八八年、四六頁。

(65) 「昔者孔子曰、『大道之行也、與三代之英、丘未之逮也。夫大道之行也、天下為公、選賢與能、講信脩睦。（中略）是謂大同。』（中略）茲幸際知遇之隆、私計近世中国不能行之、而日本為易。」「中国問学真種子幾乎絶息。」「近者、中国之所以亡、亡於聖教之隳廃。聖教隳廃、則奔競功利之路開、而礼義廉恥之風息。欲不亡得乎。知中国之所以亡、則知聖教之所以興矣。」（朱舜水著、朱謙之編『朱舜水集』、中華書局、一九八一年、一一三、一七四、一八三頁。）

(66) 韓東育「朱舜水「東夷」褒貶的初衷与苦衷」、『東北師大学報（哲学社会科学版）』二〇一二年第一号、二〇一二年一月、十二頁。